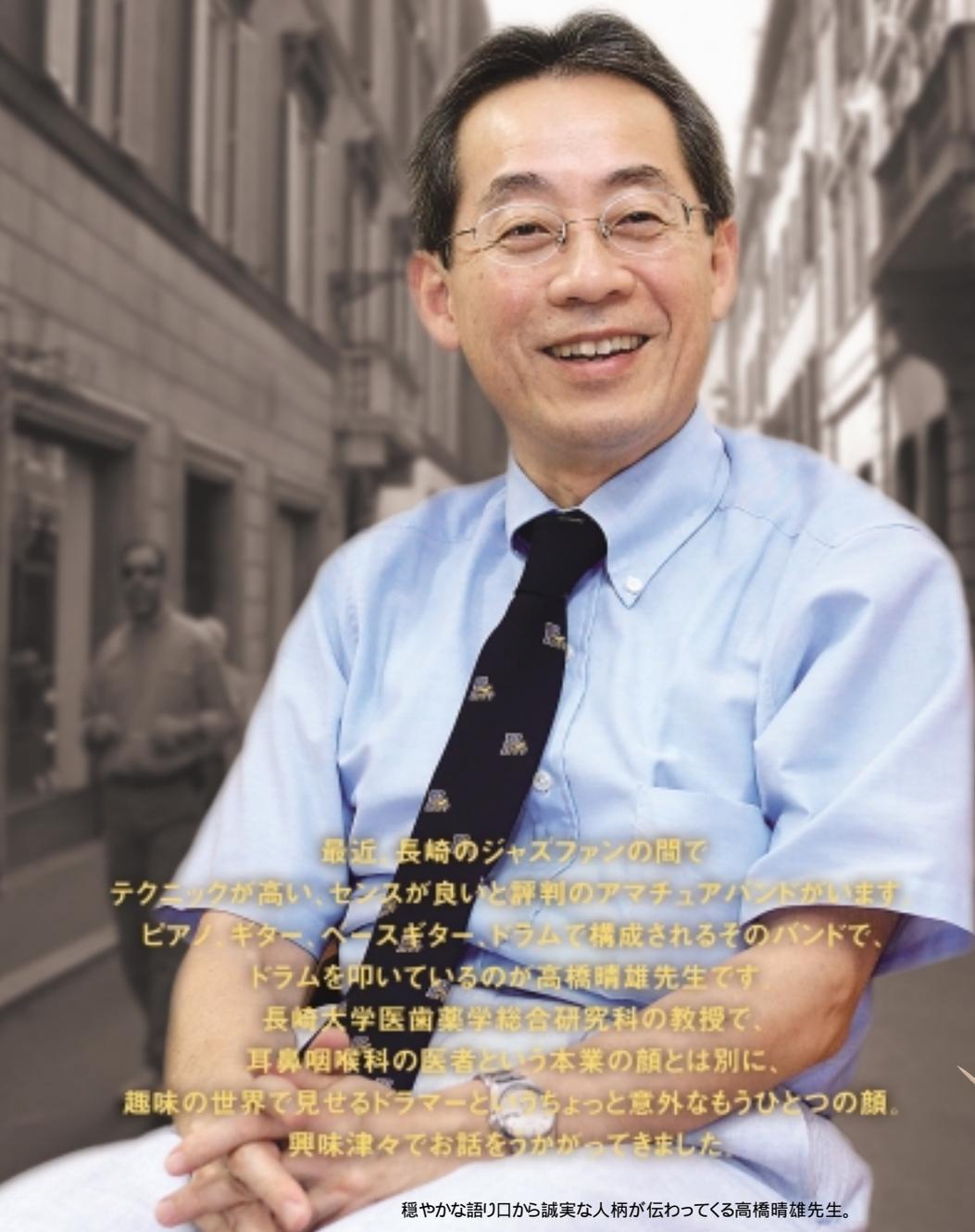


大学院医歯薬学総合研究科

高橋 晴雄 教授

Hanno Takahashi

# 医療もジャズも クリエイティブなところは 同じかもしれない



最近、長崎のジャズファンの中で  
テクニックが高い、センスが良いと評判のアマチュアバンドがいます。  
ピアノ、ギター、ベースギター、ドラムで構成されるそのバンドで、  
ドラムを叩いているのが高橋晴雄先生です。  
長崎大学医歯薬学総合研究科の教授で、  
耳鼻咽喉科の医者という本業の顔とは別に、  
趣味の世界で見せるドラマーというちょっと意外なもうひとつの顔。  
興味津々でお話をうかがってきました。

穏やかな語り口から誠実な人柄が伝わってくる高橋晴雄先生。

ひと息つく時間もない  
教授、医者としての  
多忙な日々

高橋先生は京都や大阪、海外など、医者としての活躍の場を移しながら、4年前に長崎大学の現職に就きました。その毎日、大学教授としての講義や臨床実習の指導、そして医者として外来の治療や手術、また専門の耳鼻科に関する講演活動のほか、日本耳鼻咽喉科学会の理事として東京と長崎を頻繁に行き来するなど、たいへんな忙しさです。「たまに、好きなCDをかけてひと息つきたいと思うことがあります。その時間があります。ん」。ようやく訪れた休日、買い物などに出る時のわずかな時間、車中で聴くのがやっとなのだそう。

お人柄は穏やかで優しい方。人と接する時は、相手の話到最后まで耳を傾け、きちんと受け止めてから、落ち着いた口調で自分の考えを伝えます。けして自分の意見を押しついたりしません。それはさまざまな患者さんを受け入れて診る医者という職業柄がもしもありませんが、医者にもいろいろなタイプがいるのは、誰もが知るところ。少なくとも高橋先生の場合は、どんな時も相手を尊重することを忘れません。

「自身の性格について、進んで前へ出ていくタイプではないですね。裏方の仕事に快感を感じるようなところがあるかも

「...。そんなちやうと控えめな態度から、誰が熱く軽妙にドラムを叩く姿を想像するでしょうか。」

## ラテン系ロック・サンタナの パーカッションに衝撃を受ける

出身は神戸。祖父の代から耳鼻咽喉科の開業医を営む家に生まれ育ちました。「子供の頃から周囲に親と同じ道を進められ、素直にそうしようと思っていました」。中学・高校と勉強に励み、テニスで心身を鍛えるという、文武両道の充実した時期を過ごしました。そして、大学受験もそろそろ終わりに近づいたある日のこと、生まれて初めて身体が「ソック」とするようない出会いを経験したのです。

「何となく、サンタナの『ラックマジック ウーマン』というLPを買ったんです。ラテン系のロックなのです。パーカッション（打楽器）がすごい！いきなり、その激しいリズムに魅せられてしまいました。」

叩く 打つ 振る こする、そ



学生時代からお気に入りのマイルス・デイヴィスのアルバム。

んな技を巧みに使い、さまざまに感情を表現豊かに刻むラテンの響きは、まさに魂のリズム。18才の少年の魂もそのとりこになってしまったのです。

## 大学の軽音楽部に入り、 どんどんジャズに夢中

京都大学に入学すると、サンタナのようなパーカッションをやりたくて迷わず、軽音楽部へ。ロック、ジャズ、ボサノヴァ、ウエスタンなど、いろいろなグループで演奏しました。そのうち同じ打楽器というところでドラムを

やるようになり、だんだんジャズに夢中になっていったのです。

ジャズはアドリブ。筋書き通りにはいかない音楽です。演奏するメンバーの感覚や気分、そういうものが反映されるからその時々によって演奏が変わります。ドラムは常にフロント、ピアノやギター（の状況に応じて）られるセンスが必要で、感覚的な面白さがあるのです。」

演奏中、どんなアドリブにも応じられる技術を身に付けるため、時間さえあれば練習。電車の中でも足を動かしてリズムを叩いてリズムを刻みました。そして、京都や大阪のライブハウスで仲間とジャズに没



京都にいる時のメンバーで出したオリジナル CD。うまいなあと思って聴いていたら、「関西にはプロ級のアマチュアがいっぱいいる。自分たちはまだまだです」とご謙遜。



頭する日々が続いたのでした。

実はこの頃、音楽の道へ進むこともチラリと頭をかすめたとか。しかし、プロになればどんな悪い状況でも、イヤな曲でもやらなといけないうと好きでいるために、趣味にとどめておくのがベストだと思い直しました。」

## 本気で医学へ打ち込むために 25年間、ジャズを手放す

次第にはまっていくジャズ。それは学業にも影響を及ぼすほどでした。留年こそしませんでした。試験はけっこう落と

しました（苦笑）。「このままではいけないと、一生懸命勉強に打ち込み、そして間もなくステイックを動かす手を止めることに。学生時代の後半のつめの部分から医者になって25年間、ジャズという趣味は捨てました。医者としてスベチャリストになるためには、少なくとも一番重要な時期というのがあるはず。やる時には本気を出してやらなければと思ったのです。」

## 耳鼻科か、心臓外科か、 机上のエピソードに託した未来

ここで、医学生時代のエピソードをひとつ。私が学生の頃は、心臓外科が最先端の医療で脚光を浴びていました。いつの時代も最先端の医療は医学生に興味をひくもので、私も非常に魅力を感じていました。6年生になり、どの科に行くかを決める時、耳鼻科か、心臓外科かおおいに迷いまして、志望を提出する日にちたも決断できなかつた。で、下宿にもどって机の真ん中に線を引き、そこにエピソードを立てて倒しました（笑）。今ではどの道に進んでいても、満足していたと思うという高橋先生。大事なものはどのような道であるつと、いかにベストを尽くしてやるかなのです。」

## 高齢化社会でますます注目される耳鼻咽喉科

医療の現場における高橋先生の主な研究テーマは「中耳炎」です。「子供の病気の定番」というイメージを持つ方が多いと思いますが、ある年齢になると治ることも多く、あまり注目されないのですが、子供の頃にきちんと治療しなかったばかりに大人になって慢性中耳炎になる方もいて、手術を必要とする場合もあります。そのように重症化したものの治療や最適な手術法、後遺症の予防などについて研究を続けています。

さまざまな「耳」の病気が、今後の高齢化社会において注目する人が増えていくだろうと高橋先生は考えています。



診療中、患者さんのちょっとした表情や言葉を見逃さない。「医師はその人に合った治療について情報を提供する。最終的な選択は患者さんです。」



実際の耳の骨を使った実習で指導する高橋先生。

高まり、今は積極的な治療や手術を希望する高齢の患者さんが増えています。

耳鼻咽喉科は、脳血管障害からくるめまいをはじめ耳、鼻、口の中、喉、そして気管など、神経内科と同じような領域から、全身管理を必要とするがんの治療や手術まで、あつかう分野が幅広いそうです。また、「耳」が受け取った言葉を、脳はどのように理解するのかといった高次機能についても、未だ解明されていないことが多いとか。医学の世界では一般外科に比べてマイナーと思われていますが、実はとてもラジカルな科なのです。

## ジャズは「コミュニケーション」で成り立つ音楽。医療の世界も…。

さて、4半世紀近くはなれていたジャズ活動を再開したのは5年ほど前のことです。「偶然、昔のメンバーに会ったのがきっかけです。本業は今も一生懸命やらなければいけないのは同じですが、基礎的な下地をつくる時期は過ぎました。今は持っている技を新しい刺激や考え方で広げていく、そういう段階だと思います。そ

「聴力、視力などの感覚器は、クオリティ・オブ・ライフに直接関わるものです。社会の関心も

「聴力、視力などの感覚器は、クオリティ・オブ・ライフに直接関わるものです。社会の関心も

の刺激のひとつにジャズがあってもいいと思うようになったのです。そして、長崎でめぐりあった仲間と、忙しい合間をぬって練習を続けています。

「ジャズは「コミュニケーション」で成り立つ音楽です。私は演奏する仲間と対話し、相手の感情ややりたいことに常に応えられるドラマーでありたいと思っています。そのことは、大学や病院で、人の意見を聞き、態度を観察し、相手をしっかり知って対応すること、これに共通しているかもしれない。また、医療の現場で、病気の原因や治療法をさぐったり、データを集めて調べたりなど、いろいろな可能性を見出すクリエイティブなところも、演奏の度に、創造していくジャズに似ている気がする」といいます。

ドラムを叩いている時は、表情が変わると言われる高橋先生。その姿は、人の心と交わるリズムの世界を心から楽しんでいくようです。「これからも、あくまでも趣味として続けたいですね。」

繊細で柔軟な音を次々にくりだす高橋先生のドラミング。多彩なリズムを自在に叩き出した名ドラマー、トニー・ウィリアムに似てきたと言われるほどうまい。



メンバー4人中3人が医師。2～3週間に1度、高橋先生の自宅に設けたスタジオで練習。多忙なメンバーのスケジュール合わせがたいへんようです。